

羽村市史編さんだより

平成29年4月

第9号

伸びゆくはむら

特集

民俗調査から見えてきたこと

- 1 News
- 3 部会の手帖
- 5 市史編さんの足あと
- 5 コラム「ちっとなべえ」

2



第6回羽村市史編さん委員会を開催

2月14日（火）、市役所で第6回羽村市史編さん委員会が開かれました。会議では、平成28年度の事業の実績や平成29年度の事業計画について報告があり、作業の順調な進捗が確認されました。また、今年度末に刊行予定の『羽村市史 資料編 近現代図録』の構成等について各委員から意見を伺いました。出された意見を今後の編集につなげ、読みやすく、わかりやすい資料編をめざします。

会議録は、市史編さん室および市公式サイトで公開しています。ぜひ、ご覧ください。



▲第6回羽村市史編さん委員会の様子

平成29年度市史編さん事業予定

『羽村市史』資料編の刊行

いよいよ『羽村市史』の刊行が始まります。平成33年度に予定している「本編」の刊行前に「資料編」を順次刊行していきます。「資料編」は、『羽村市史』本編の記述の根拠となる資料を掲載するもので、各部会の分野ごとに編集して刊行する予定です。

本年度は、中世期の古文書類や石造供養塔類とその解説をまとめた『羽村市史 資料編 中世』と、明治期から現代にいたる羽村のあゆみを、写真、チラシ・ポスター、イラスト、図表、年表などでまとめ、説明やキャプションをつけた『羽村市史 資料編 近現代図録』を刊行します。

刊行の予定時期は平成30年3月になります。市民の方々への頒布も予定していますので、詳細が決まりましたらこの紙面でご案内してまいります。

各部会の調査活動

本年度は、市史編さん事業が大きく動きます。これまでは、羽村市に関する資料が、どのような内容のものが、どこに、どれだけ所在しているかをまとめる作業が中心でしたが、今後は、各部会とも資料編の編集を視野に入れながら、これまでの調査で得られた個別資料の内容分析を進めていく作業に移っていきます。市民の方々にご協力をいただく場面も多くなりますが、よろしく願いいたします。

第3回羽村市史関連講座の実施

このように、調査の内容が変化していく中で、そこから得られる再発見や新しい知見が増えてきます。その情報をいち早く皆様にお届けする「羽村市史関連講座」を、本年度も開催します。詳しい日時や内容については、今後の紙面や広報などでお知らせしていきますので、どうぞご期待ください。



表紙の写真 根がらみ前水田のチューリップ

羽村の春といえば、堰の桜と根がらみ前水田のチューリップ。

ここには、休耕期を利用して60種40万本余りのチューリップが植えられ、さながら色鮮やかなじゅうたんを敷き詰めたような景色は、多摩川の対岸に広がる丘陵の新緑とみごとなコントラストを見せます。

幾世代も受け継がれてきた祭りばやしの音色に誘われて、花々の競演が楽しめる季節です。(写真は平成28年春の様子 広報広聴課より借用)

●民俗と民俗学

「民俗」とは、広辞苑によると「人々の伝統的な生活文化。民間の習俗。民族の伝承文化。」とあります（『広辞苑』第六版）。これらのさまざまな事象の移り変わりを記録し、変化の要因を考察して、後世へ残していくとともに、私たちの生活文化のありようを明らかにしていく学問が民俗学と言えます。民俗学では、①生産、生業に関すること、②衣食住に関すること、③交通、運輸、通信に関すること、④交易に関すること、⑤社会生活に関すること、⑥信仰に関すること、⑦民俗知識に関すること、⑧民俗芸能、娯楽、遊戯に関すること、⑨人の一生に関すること、⑩年中行事に関すること、⑪口頭伝承に関することなどを研究対象としています。

●民俗学の調査方法

民俗学の調査対象は「記憶」「伝承」「モノ」が主になるため、それを記憶している人、伝承してきた人、使ってきた人たちが大変重要になります。民俗学の調査方法は、それぞれの方に聞き取りを行い、それを文字に起こす作業になります。この時、古い写真なども「その当時の日常生活の様子」を物語る貴重な資料になります。聞き取り調査が唯一無二と言っていいほど重要な調査方法です。また、その記憶や伝承が普遍的なものなのか、地域性があるのか、ごく限定的なものなのかなどの裏付けも必要になってきます。このような細かな作業の積み重ねにより、「人々の日常生活の様子」を復元していきます。



▲膳椀倉に所蔵されていた什器

●民俗調査から見えてきたこと

『羽村市史』編さん事業では、これまで多くの方々への聞き取り調査を実施してきました。現在の羽村

市域の地域的特性としては、青梅線が一つの境界線になります。青梅線より西側は、江戸時代からの集落が点在していた地域になります。青梅線より東側は、五ノ神や小作台地区は古くからの集落でしたが、多くは首都圏整備法による指定とその後の土地区画整理事業によって整備されてきた地域です。

青梅線の西側での聞き取り調査では、昭和20年代以降の生活の様子がお話の中心でしたが、そのなかで次の点が浮かび上がってきました。

- ① 生業が移り変わっている。純粋な農村地域のように一貫して「畑作」にこだわるのではなく、時機を見て養蚕、畜産（豚、牛等）などに移り変わっている。
- ② 冠婚葬祭等に関わる古くからの風習やコミュニティの存在が記憶されているものの、生活様式の変化に伴って、実際には段々消滅してきている。
- ③ 数軒の家では、今でも古くからの風習、年中行事を行っている。
- ④ 時期的に、羽村の古い民俗が確認できる限界が近づきつつある。



▲市内に残る蚕室の内部 右側に「カイコッカゴ」

青梅線の東側における調査は、町内会で行われている「春祭り（さくら祭り）」の聞き取りを目的に、いくつかの地区の町内会長にお話をお聞きしました。この地域では、古い集落から分かれて新しく所帯を持った家、昭和30年代以降に引っ越してきた家、団地やマンションなどの集合住宅などが混在しています。これらの地域では、地域でのイベント的な行事等を行っているところもありますが、家ではそれぞれの出身地での行事等を、その家ごとに変化させながら行っている様子も伺えます。

部会の手帖



各部会の活動の様子を紹介します。
※今号では平成29年1月から3月までの活動をお知らせします。



第1部会 ～原始・古代・中世～

主だった中世史料の調査がほぼ終了し、補足的な調査を継続しています。他の自治体史に掲載されている史料の確認作業なども進めています。今後は整理分析に軸足を移しつつ、羽村市域の中世の様子に迫っていきます。

縄文班では、土器の接合関係を確認する作業、図面のデジタルトレース化を進めています。あわせて、新奥多摩街道建設時の山根坂上遺跡の遺物出土状況を記録した台帳の入力作業を行い、第3次調査分については完了しました。



▲中世資料調査の様子
(写真は平成28年3月の市外調査)

第2部会 ～近世～

市内旧家に保管されている古文書の確認作業も大詰めを迎えています。今回の調査で新たに発見された史料も多く、現在はその整理作業も並行して行っています。旧家の古文書は、江戸時代の村に関する史料だけでなく、明治以降の組合・消防団に関するものなど多岐に渡る内容が確認できています。

このような新たに発見された史料の調査結果についても、『羽村市史』に反映していくための分析を行っていきます。



▲市内旧家に残されていた新出史料群の整理の様子

第3部会 ～近代・現代～

第3部会では、羽村の学校教育に関する資料調査も進めています。各小学校にご協力いただき、周年記念誌を確認したほか、戦後羽村で作成された社会科副読本や教育関連資料などについて調査するとともに関係者への聞き取りを行いました。

さらに、様々な側面から近現代期の羽村のありように迫っていくため、多くの方からお話を伺いました。今後も聞き取りさせていただく際には、ご協力をお願いします。



▲小学校周年記念誌確認作業の様子

第4部会 ～自然～

市内には今も立派なシラカシの生垣が残っています。生態班では、その生垣に関する管理方法や役割について聞き取り調査を行いました。生垣を下からのぞくと、シラカシの枝がしっかりと組み立てられており、防風の機能は今でも健在です。

地形・地質班は昔の多摩川がどのように地形を形成してきたのかを追究するため、近隣市町村の礫層調査を続けています。気候班は冬の観測として、いつもの昼間の観測に加え、早朝と夜の時間帯の観測も行ないました。



▲シラカシの生垣調査の様子

第5部会 ～民俗～

8月に引き続き、2月にも3日間の市内合宿調査を実施しました。30名の方々に貴重なお話をお聞きすることができました。ご協力ありがとうございました。また、春祭りの調査を行うため、必要な準備を進めています。神社での祭礼はもちろん、神輿や山車の巡行、おはやしの演奏、羽村駅西口での六社山車曳き合わせなどの様子を調査していく予定です。町内会での春祭り（さくら祭り）についても、地域の年中行事という視点で記録していきます。



▲神輿と山車の巡行（写真は平成28年春の様子 広報広聴課より借用）

市史編さんの足あと



※①～⑤は部会の数字です。(例) ① ⇒ 第1部会

月	日	できごと
1月	6日(金)	④ 礫層調査(あきる野市)
	12日(木)	① 出土土器接合関係調査
	15日(日)	羽村市史編さんだより 第8号発行
	17日(火)	⑤ 聞き取り調査(個人宅)
	24日(火)	② 市内史料調査(五ノ神) ※以後定期的に実施
	25日(水)	④ 市内礫層調査
2月	1日(水)	④ 礫層調査(あきる野市)
	2日(木)	③ 市外史料調査(府中市) ※以後6回実施 ④ 気温の移動観測・風向風速の観測
	3日(金)	④ 気温の移動観測・風向風速の観測
	8日(水)	④ 礫層調査(市内・青梅市)
	11日(土)	⑤ 六社山車曳き合わせ事前調査

月	日	できごと
2月	14日(火)	第6回羽村市史編さん委員会 ④ 礫層調査(あきる野市)
	16日(木)	① 市外史料調査(入間市・日野市)
	20日(月)	⑤ 市内合宿調査
	21日(火)	⑤ 市内合宿調査
	22日(水)	⑤ 市内合宿調査
	27日(月)	① 縄文班データ確認調査 ④⑤ 聞き取り調査(個人宅)
3月	15日(水)	第10回羽村市史編さん本部会議 ④ 礫層調査(市内・昭島市)
	16日(木)	③ 市外史料調査(青梅市)
	17日(金)	③ 聞き取り調査(個人)
	21日(火)	③ 聞き取り調査(個人)
	30日(木)	④ 気温観測データ(定点)の回収
	31日(金)	④ 礫層調査(あきる野市)

コラム

ちっとんべえ

昨年の9月、市内にイノシシが出没したことはご存知の方も多と思います。羽村西小学校付近や多摩川の河原を移動し、白昼に市内を堂々と散歩していたようです。

畑や農作物など人に害をもたらす哺乳類を害獣とよびます。被害が大きいと人にとっては痛手ではかありませんが、これはその土地と野生動物の距離が近いことの象徴でもあると思います。

市内には多くの緑地が残り、大きな公園や草花丘陵は私たちの絶好の散歩コースです。緑地には草木が生い茂り、昆虫や野鳥があつまり、立派な生態系があります。

市史の仕事をしていると、多くの資料と出会います。しかし旧家に残されている貴重な資料に負けず、羽村には多くの自然も残されています。資料のみならず自然の宝庫でもあると感じています。

第9回 「イノシシとの出会い」

羽村神社から市街地を撮影中、偶然にも対岸の河原を疾走するイノシシをカメラにおさめることができました。昨年は被害こそ出なかったものの今年もまたどこからかひょっこりと現れるかもしれません。しかしこちらにも散歩中にイノシシとは遭遇したくありません。野生動物とのほどよい距離感は、自然と上手に向き合う手段のひとつではないかと考えさせられました。

(S.K 記)



▲河川敷を走るイノシシ
奥は宮の下運動公園

※「ちっとんべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。

羽村市史編さんだより

平成29年7月

第10号

伸びゆくはむら

特集

はむらの縄文時代

2

- 1 News
- 3 部会の手帖
- 5 市史編さんの足あと
- 5 コラム「ちっとんべえ」

**N****e****w****s**

市内春祭りの調査を行いました

4月8日（土）・9日（日）に市内春祭りの調査を行いました。

4月8日（土）は、春季例大祭宵宮と羽村駅西口での六社山車曳き合せなどの調査を行いました。

山車の曳き合せは、元々玉川神社と稲荷神社の山車が行っていたものが、徐々に増えていき、東日本大震災をきっかけに、平成24年から六社で行われるようになったそうです。9日（日）の本宮の調査では、雨の中、八雲神社の神輿の川渡御や、各地区の祭礼の特徴や違いについて調べました。

調査結果などについては、平成31年度に刊行予定の資料編や平成33年度に刊行予定の本編の民俗分野の記述に反映していきます。



▲今年の市内春祭りの様子

近隣市でも市史編さんを行っています

羽村市では、平成33年度の本編刊行に向けて、平成25年度から市史編さん事業を行っています。市史の編さんを行っているのは、羽村市ではありません。

現在、東京都の26市中、羽村市以外に6つの市で市史編さんが行われています。市史編さんが行われているのは、八王子市・立川市・府中市・小金井市・狛江市・清瀬市で、いずれも8～11年という長期の計画で調査・刊行が行われています。

市史の編さんは、過去に蓄積された資料や新出資料、また歴史学の分野にとどまらず、自然や民俗など多岐にわたって調査・研究を行い、それらを取りまとめ、先人が築いた歴史を次代に継承する重要な事業です。

自治体によって体裁や冊数はさまざまなので、その違いをしてみるのもおもしろいかもしれません。



▲新八王子市史

表紙の写真 多摩川と崖線 ～縄文人の豊かな暮らし～

縄文時代、羽村の地に暮らした人びとは、多摩川では貝や魚の漁を行い川の恵みを、崖線では木の実や野草などを採集して山の恵みを楽しんだことでしょう。

彼らが現在の羽村を見たら、自分たちの生きた時代との違いに驚くことは容易に想像できますが、多摩川や崖線などの自然から受ける豊かな恵みは、今も昔も変わりません。

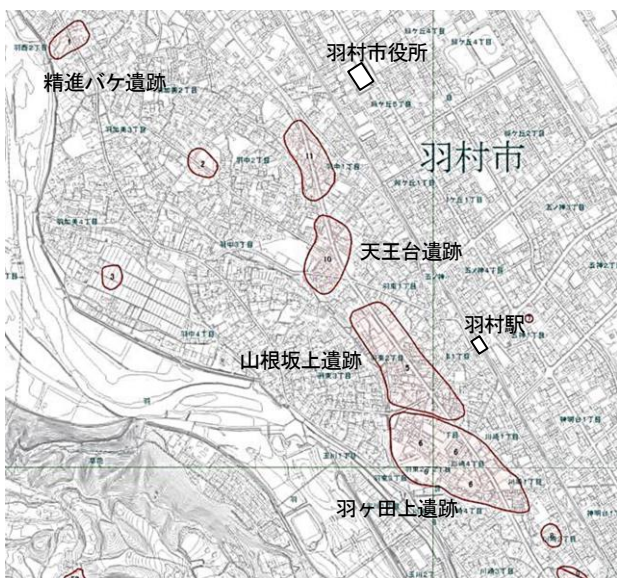


●市内の遺跡

市内には、「周知の埋蔵文化財包蔵地」と呼ばれる区域が10ヶ所あります。いわゆる「遺跡」として認識されている場所です。「遺跡」とは、広義の解釈では「人々の生活や行動の痕跡」といえます。ただ、多くの方はそれが「土に埋まった」状態を思い浮かべるでしょう。

多摩地域の多くの遺跡がそうであるように、羽村の遺跡も河岸段丘の崖線沿いに分布しています。羽ヶ田上遺跡、山根坂上遺跡、天王台遺跡、精進バケ遺跡は、羽村を代表する縄文時代の集落遺跡です。集落遺跡とは、過去の発掘調査などで複数の住居跡が見つかったりしている遺跡のことです。

羽村にも、縄文時代から人びとが生活していたことがわかります。



▲市内の遺跡分布（『東京都遺跡地図』加筆修正）

●縄文時代とは

縄文時代は、今から約15,000年前から約2,400年前のおよそ13,000年の期間をいいます^(※)。土器を使用し、弓矢による狩猟が始まり、定住生活が広まっていくのが縄文時代といえます。何よりも食糧事情の変化、とりわけ食物採集経済の発達が大きな要因と考えられています。

あまりに長い時間なので、考古学では古い方から「草創期」「早期」「前期」「中期」「後期」「晩期」と6つの時期に分けています。羽村市の4つの集落遺跡は、いずれも今から約5,000年前から約4,000年前に区分される「中期」の遺跡です。

縄文時代のイメージは、青森県三内丸山遺跡の調査以降大きく変わってきています。自然と共生し、豊かな感性を持った非常に文化的な生活が営まれていたと想像されています。

その中でも、羽村に人々が住んでいた「中期」は、気候も安定して、狩猟採集とはいえ豊富な食料にも恵まれ、縄文文化の爛熟期ともいわれます。山根坂上遺跡からは、華やかに装飾された土器やランプに使ったと考えられる釣手土器、土製の人形や鈴（土偶、土鈴）などが発見されており、当時の人びとの生活の様子に想像が掻き立てられます。

（※：期間については諸説あります。）

●『羽村市史』が目指すもの

山根坂上遺跡からはこれまでの調査で60棟以上の住居跡が発見されています。いずれも縄文時代中期の住居跡ですが、すべてが一時期に同時に存在したわけではありません。前述のとおり中期の区分だけでも約1,000年の時間幅があります。『羽村市史』編さん事業では、遺跡発掘調査での土器の出土位置や破片の接合関係などを再検討することで、この時間幅をより短く設定しようと試みています。この試みにより、同じ時期に存在した住居を把握することができ、生活の様子をより細かく再現することができると考えています。

遺跡に残された住居跡や土器などが伝えてくれる情報を丹念に読み取っていくことで、羽村の縄文時代を復元することができるのです。



▲発見された住居址と土器（山根坂上遺跡/平成3年）

部会の手帖



各部会の活動の様子を紹介します。
※今号では平成29年4月から6月までの活動をお知らせします。

用語の解説

みょうじたいとう
苗字帯刀…江戸時代、特定の平民が許されて苗字を名のり、刀を差したこと。
れき死…車両など車輪にひかれて死ぬこと。

第1部会 ～原始・古代・中世～

縄文班では、引き続き、羽村の縄文時代をより詳細に復元する編年作成のための、遺物出土状況のデータ整理と遺構のデジタルトレース作業を進めています。

中世班では、国立市での三田氏関連資料調査を行ったほか、これまでに収集した板碑や五輪塔などの石造物の拓本や実測図、古文書史料の調査カードや写真などの整理分析と筆耕作業を進め、「資料編」編集に向けての、具体的な章構成と内容をまとめています。

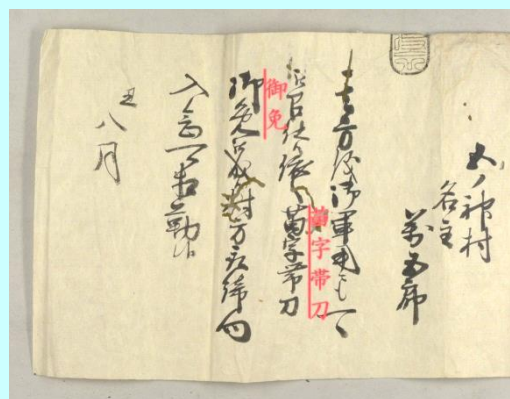


▲平成元年の天王台遺跡調査の様子
(出典：『羽村町天王台遺跡調査報告』)

第2部会 ～近世～

第2部会では、引き続き平成30年度の資料編刊行に向けた作業を行っています。市内旧家の調査では、新出史料の整理を行いながら資料編掲載候補を選定し、データ化に向けた作業を進めています。

今回の調査では、旧家の歴史や家業について知ることのできる「苗字帯刀」を許可した免許状や、酒造業を始めるための鑑札（許可証）の発行を求めるものなど、さまざまな史料が確認できました。



▲苗字帯刀を許可した領主からの通知

第3部会 ～近代・現代～

第3部会では、『羽村市史 資料編 近現代図録』の刊行に向けた作業を進めています。これまで整理・収集してきた写真をもとに、写真に写っている人や物、その背景、撮影時期を考慮しながら、写真の選定と原稿執筆を進めています。

またこれらの作業と並行しながら、聞き取り調査も進めています。羽村の青年団（会）や羽村の選挙に関する聞き取りでは、戦後の混乱期から現在に至る羽村の変化や人びとの暮らしの一端をうかがい知ることができました。



▲資料整理の様子

第4部会 ～自然～

地形・地質班では、市内および近隣市町村の礫層調査を続けています。現地では、礫の種類・形状の記録、サイズの測定などを行っています。

気候班は、現在の気象観測だけでなく、旧家の農業・養蚕日誌から過去の天気などの情報も収集しています。

生態班は、タヌキやハクビシンなどの“れき死体”に関するデータの収集を行い、市内で回収された野生動物の情報収集を行っています。



▲ルーペを使い礫を観察している様子

第5部会 ～民俗～

4月8日（土）の春季例大祭宵宮と羽村駅西口での六社山車曳き合せでは、各神社の行事の様子や、八雲神社の人形山車のほか各神社の山車の様子と各保存会のおはやしなどを確認することができました。翌日の本宮は、あいにくの天候により、一部の調査を断念しましたが、八雲神社神輿の川渡御など、羽村の祭礼に関する貴重な行事を確認することができました。

また、市内に残されている豚舎について、現地調査を行いました。



▲八雲神社神輿の川渡御の様子



月	日	できごと
4月	4日(火)	③ 聞き取り調査(個人宅)
	7日(金)	③⑤ 聞き取り調査(個人)
	8日(土)	⑤ 春季例大祭宵宮等調査 ⑤ 六社山車曳き合せ調査
	9日(日)	⑤ 春季例大祭本宮調査
	12日(水)	④ 礫層調査(市内・青梅市)
	15日(土)	羽村市史編さんだより 第9号発行
	26日(水)	④ 市内礫層調査

月	日	できごと
5月	6日(土)	⑤ 旧豚舎調査(個人宅)
	17日(水)	④ 市内礫層調査
	29日(月)	④ 市内礫層調査
6月	7日(水)	④ 礫層調査(市内・青梅市)
	15日(木)	① 三田氏関係文書資料調査(国立市)
	28日(水)	② 市外史料調査(東村山市)
	30日(金)	④ 気温観測データ(定点)の回収

コラム

ちっとんべえ

第10回 「江戸のお薬事情」

現在、体調不良の時に病院へ行くことはごく一般的なことです。江戸時代、医者にかかることは今ほど容易ではありません。しかし、当時はしばしば飢饉が起これ、それに伴って「時疫(流行病)」が発生したり、普段は食べない怪しげなキノコや魚、野草などを食べて食あたりになってしまうことは珍しくありませんでした。

では、当時の人びとはこのような事態をどうやって乗り越えていたのでしょうか。今回紹介する市内旧家所蔵の史料は、時疫・食あたりの対策として領主から村へ出されたものです。

時疫の場合

(本文)：時疫にハ牛蒡をつきくたき、汁をしほり、茶碗半分ツツ二度飯(飲)て…

(内容)：茶碗半分のゴボウの搾り汁を2回服用。

食あたりの場合

(本文)：一切の食物にあたり煩に、大つふなる黒大豆を水にてせんし、幾度も用てよし、魚にあたりたるにハイよいよ吉

(内容)：大粒の黒大豆を水に煎じて飲む。特に魚の食あたりには効果が高い。

江戸時代、時疫に効くとされた「ゴボウの搾り汁」が、どんなものなのか作ってみました。ゴボウ1本を細かく切り、茶碗1杯の水に入れて揉み込むこと20分。完成した汁を半分飲むと、口の中に「ゴボウ本来の味わい」が広がり、飲んだことを後悔するのに時間は必要ありませんでした。

ただ、飲み終えた後には何となく「体調が良くなった」気がするの不思議なものです。ともあれこの史料には、そのほかにも時疫・食あたりに関する対処法が記されており、当時の人びとが体調不良の際に症状にあった対応をとっていたことが想像されます。

※これは古文書に記されたものであり、実際の効果を保証するものではありません。(S.Y記)

▶ 搾り汁が作ったゴボウの



※「ちっとんべえ」とは、羽村の昔ことばで「ちょっと、少しばかり」という意味です。